

「パウロ、石を投げつけられる」

2016年06月17日

使徒言行録 14 章 19 節～20 節。ところが、ユダヤ人たちがアンティオキアとイコニオンからやって来て、群衆を抱き込み、パウロに石を投げつけ、死んでしまったものと思つて、町の外へ引きずり出した。しかし、弟子たちが周りを取り囲むと、パウロは起き上がって町に入ってしまった。そして翌日、バルナバと一緒にデルベへ向かった。

パウロとバルナバはリストラに来た。パウロは、生まれつき足の不自由な人に、「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と宣言すると、彼は躍り上がって歩きだした。これを見た群衆は声を張り上げ、「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところに降りになった」と叫んだ。そして、バルナバを「ゼウス」、説教をしたパウロを「ヘルメス」と呼び、雄牛数頭と花輪を運んで来て、群衆と一緒に二人にいけにえを献げようとした。二人は慌てて群衆の中に飛び込んで、叫んだ。私たちは神ではなく、あなた方と同じ人間である。あなた方が人間の手で造った偶像から離れ、真の神に立ち帰るように福音を語っている。真の神は人間や自然を超越した創造主なる神で、この神の恵みに与って生かされている。これを聞いて、群衆は二人にいけにえを献げることをようやく止めた。人は神ではない、天地を造られた神のみが神である。この真理をリストラで鮮やかに示したのである。

二人のリストラ宣教は町に大きなインパクトを与えた。これを伝え聞いたユダヤ人たちが先に宣教したアンティオキアとイコニオンから、二人の宣教を止めさせようと追いかけて来た。彼らは群衆を抱き込み、パウロに石を投げつけた。死んだと思い、町の外へ引きずり出した。パウロはコリント書（二）11 章 25 節で「鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました」と書いている。「石を投げつけられたことが一度」はリストラでの出来事であろう。死んだと思われたというから、相当の石を投げつけられたのである。

町の外に放り出されたところに、弟子たちが心配して取り囲むとパウロは起き上がり、町に入った。そして翌日、バルナバと一緒に、次の宣教地デルベに向かった。日々、動転するような体験をしているが、何事もなかったかのように、宣教を進めている。

パウロとバルナバの宣教に対し、アンティオキアとイコニオンのユダヤ人たちが追いかけて来て妨害したように、同胞からの反発、妨害という形は、後のパウロの宣教活動に常に起こってくることになる。ユダヤ人は極めて執念深い民族であることは聖書を読めば、誰でも納得できる。殊に、ディアスポラ（世界の各地に散らされた）のユダヤ人たちはユダヤ教によって結束していた。彼らはモーセの十戒を中心にした律法を厳格に守り、神からの祝福に与りたいと熱心な宗教生活を送っていた。ところが、パウロは、使徒言行録 13 章 38 節、39 節で「兄弟たち、知っていただきたい。この方（主イエス）による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたがたがモーセの律法では義とされえなかったのに、信じる者は皆、この方によって義とされるのです」と説教し、律法厳守によって神からの義を受けるのではなく、主イエスの十字架と復活によって罪が赦され、神に義とされていると語った。律法ではなく、信仰によって義とされるという宣教を許せないと、執拗に妨害したのである。また、パウロの宣教が異邦人たちに受け入れられたことへのやっかみもあっただろう。「信仰義認」はパウロの説く福音の核心であるが、この福音がユダヤ教から分離し、世界の人々の救いとなる宗教に成長していく決定的な要因になったのである。